

校長として卒業してゆく生徒たちに何を語るか

副塾頭 長 野 藤 夫

(小清水町立小清水中学校長)

卒業証書授与式で、巣立ちゆく生徒たちに語る。それは、校長にのみ許された最後の授業である。ゆえに、「春の日差しが……」とか、「流氷も去り……」だとかいう言葉には、何の興味もない。私にとって、「校長式辞」というのは「道徳の授業」に他ならない。

以下、平成24年度および平成25年度の式辞を示す。

また、それらが北海道新聞にも取り上げられ、オホーツク版の記事となった。それも合わせて掲載するが、私自身は、私の式辞に関する批評や評価にはまったく関心がない。

1

平成24年度 卒業証書授与式

式 辞

早いものです。ついにこの日がやって参りました。

まずは、ハレの日を迎えた卒業生諸君、そして保護者の皆様、誠におめでとうございます。

さて、今年度は、卒業生諸君に道徳の授業を四時間ずつ行いました。この卒業証書授与式における式辞は、五時間目、校長としての最後の授業であると思ってください。

幕末に我が国にやってきた外国人たちが、腰を抜かささんばかりに驚いたことが二つあったそうです。

まず第一に、最も貧乏なのが支配者階級だったということです。

支配者である武士が、下の身分とされていた人たちから借金をして、ぎりぎりの質素な生活をしているという姿が、外国人には信じられないことでした。外国では、支配者になったら私腹を肥やし、人々から搾れるだけ搾り取って贅沢に暮らし、支配される者は食うや食わずの生活をするというのが常識だったからです。

それとはまったく反対に、支配している者の方が貧しくて、支配されている者の方が豊かな暮らしをしているという国は、世界じゅうでただ一つ、日本だけだったということです。

二つ目です。トロイの遺跡を発掘したシュリーマンは、幕末に我が国を訪れたときのことを、旅行記に次のように書いています。

「横浜港に着いたとき、税関の係員は私に「中身を調べるから荷物を開けるように」と指示した。荷物を解くとなると大仕事だ。ぜひ免除してもらいたいと、二人の係員にそれぞれおよそ六万円ずつを賄賂として差し出した。

ところが、何と彼らは「自分たちは日本男児である」と胸を叩き、お金の受け取りを拒否したので

ある。日本男児たるもの、お金につられて決まりをねじまげ、義務を蔑ろにするわけがあるまい、自分たちをバカにするな、というのだ。おかげで私は荷物を開けなければならなかった。

彼ら武士に対する最大の侮辱は、たとえ何かを頼む場合であっても、お金を贈ることである。また、彼らもお金を受け取るぐらいなら、切腹を選ぶのである」

その当時、世界じゅうで賄賂が通用しない国はただ一つ、日本だけだったというのです。

評論家の日下公人さんが、日本に帰化した友人の話を本に書いていました。

「日本に帰化して赤いパスポートをもらって心底驚いたが、このパスポートを見せると、世界じゅうどこへ旅行しても「やあ、いらっしやい。ゆっくりしてってください」と歓迎される。日本人は世界じゅうから愛されているとわかった。以前の国籍の時は、そんなことがまったくなかった。日本人であるというだけで、こんなにも違ってくる。しかし、この赤いパスポートのありがたさを、当の日本人は知らない」

我が国は、そして我々日本人は、世界の人々からこのように評価され、賞賛されているのです。

諸君の体の中には、そのような日本人の血が流れているのですよ。

初代の神武天皇に始まり、第百二十五代の今上陛下を戴く我が国が如何にすばらしい国であるか、日本人が如何に優れた民族であるか、決して虚言に惑わされることなく、その事実をしっかりと自覚してください。そして、心が寒くなるようなニュースを耳にすることが多い今日こそ、世界じゅうから称えられる日本人たるの伝統を取り戻し、受け継ぐとともに、我が国を愛する心と、深い意味のある国歌「君が代」、国旗「日の丸」に誇りを持ち、我が国の名に恥じない、武士の如き品格のある、堂々たる人生を積み上げて行って欲しいと願っています。

それにいたしましても、このような日本を作り、我々に残してくれた先輩方やご先祖様には、本当に頭が下がります。本日、駆けつけてくださった全小清水・中学校同窓会の役員の皆様も、お母さんやお父さんも、そのような先輩方のお一人なのです。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

本日は、自衛隊の方々にもお出でいただきました。美幌駐屯地/小隊長・竹口晃男様、網走地域事務所長・中島敏隆様であります。

さらに、小清水駐在所長・上野英樹様にもお越しいただきました。

今更申し上げるまでもなく、自衛隊や警察の皆様は、東北の大震災のときにはご自身の危険も顧みず、昼夜の別なく救援活動にあたってくださいました。美幌駐屯地からも、多数の方々が赴かれています。国民として、どんなに感謝しても感謝しきれるものではありません。

また、我が国は現在、中華人民共和国による尖閣諸島への領土侵犯、巡視船への漁船体当たり、自衛隊への攻撃用レーダー照射といった野蛮な挑発や、大韓民国による国際法、条約などの国際的な約束事を無視した卑劣な行為、竹島の不法占拠などの外交危機にあります。とりわけ私たちは、大東亜戦争後にロシアに略奪されたままになっている国後、択捉、歯舞、色丹の北方領土を目の前にしています。

もちろん、北朝鮮による日本人拉致事件、度重なる弾道ミサイルの発射や核実験という、絶対に許せない未解決の問題も忘れてはなりません。

諸君はもはや義務教育を終えるという成長段階にあるわけですから、そのような現実も見据えなくてははいけません。

我が国が、そのような度し難い無法国家に取り囲まれ、日本国憲法の前文で語っている「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持」することが絶望的な状況の中で、自衛隊や警察の皆様は命を懸けて我々国民を守ってくださっているのです。

我が国の誇りであり、まさに武士道精神を体現されている自衛隊や警察の方々をこうしてお招きできましたこと、大変うれしく存じます。

本校も、自衛隊の方々には大変お世話になっているのです。

グラウンド横の道路を挟んで反対側に石碑が建っているのを、本日ご来場の皆様は先刻ご承知のことと存じます。

昭和四十六年の町内中学校再編にあたり、現在の校舎を建設するために、無償でこの敷地の造成をしてくださったのが、他ならぬ陸上自衛隊美幌駐屯地の方々でした。石碑は、それを記念して建立されたものなのです。

この度の新体育館の完成、そして近く始まる新校舎の建設を機に、改めて自衛隊の皆様と本校との絆を固くしてまいりたいと願っております。新校舎落成後、外構工事にて記念の石碑を校舎前に移設することが決まっております。その際には、美幌駐屯地の皆様はもちろんのこと、多くの方々をお招きし、新校舎竣工の記念の意味も込めて、記念碑除幕式を挙行したいと考えております。

小清水町教育委員会委員長・鬼塚茂様、PTA会長・更科浩司様、全小清水・中学校同窓会会長・木戸寛治様、北海道教育庁オホーツク教育局/義務教育指導監・齋藤秀之様をはじめとするご来賓の皆様、本日はお忙しい中、ご臨席を賜り誠にありがとうございます。本日、小清水中学校を卒業していく生徒たちは、ここ小清水町の宝であり、何物にも代え難い財産であります。必ずや、将来の小清水町を、北海道を、そして我が国を背負って立つ人材となるはずです。今後とも温かいお力添えを、よろしくお願い申し上げます。

そして、保護者の皆様。

大切な、大切なお子様を、本日、確かにお返しいたします。

皆様と「共に育てる」と書く「共育」を展開することの重要性を、ますます実感しているところであります。

本校職員一同、力を尽くして教育に邁進してきました。もちろん、あんな山もあればこんな谷もありましたが、学年部を中心に、保護者の皆様とが力を合わせて乗り越え、今日この日を迎えることができました。今となりましては、すべてが思い出ということになりましょう。深く、深く感謝しております。

最後に、もう一度、卒業生諸君。

今回の卒業証書授与式から、卒業生の歩く道にはすべて赤絨毯を敷き詰めました。これは、三年間にたった一度だけ、卒業証書授与式でのみ歩むことが許される、夢溢れる未来へと続く道の象徴です。

新たな気持ちで自分の未来を考えながら、この赤絨毯を踏みしめ、小清水中学校から旅立っていただく。

そして、ふるさと・小清水を大切にしてください。

「すべては子供たち一人一人のために」

北海道教育委員会の掲げるこのスローガンを、私は今、改めて心に刻んでいるところです。

論語の中に、「吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎」という一節があります。

果たして自分は「すべては子供たち一人一人のために」という学校づくりができていたであろうかと反省する毎日ですが、ご来場の皆様におかれましては、「小清水の子供を育てる」という共通の目的の下に、今後とも中学校へのご協力と、中学生へのご支援をお願い申し上げ、式辞といたします。

平成二十五年三月十五日

小清水町立小清水中学校長

長 野 藤 夫

②

平成25年度 卒業証書授与式

式 辞

早いものです。ついにこの日がやって参りました。

まずは、ハレの日を迎えた卒業生諸君、そして保護者の皆様、誠におめでとうございます。

さて、まずは卒業生諸君。私が小清水中に赴任して、初めて迎えた新入生でした。あの日の光景を、今でもはっきりと覚えています。それだけに、私にとっても大変な思い出のある学年なのです。

そんな君たちに、これまで六時間の道徳の授業を行ってきました。この卒業証書授与式における式辞は、七時間目、校長としての最後の授業であるということになります。そのつもりで聞いてください。

私は、今からおよそ二十年前の、当時マレーシアの首相であったマハティール氏の演説を忘れることができません。マハティール首相は、香港で開かれた欧州・東アジア経済フォーラムで、世界各国の代表を前にして次のような演説をしたのです。

「質を落とさずにコストを削減することに成功し、かつては贅沢品だったものを誰でも利用できるようにしたのは、日本人である。魔法も使わずに、奇跡とも言える成果を創り出したのだ。

日本の存在しない世界を想像してみたらよい。

もし日本という国がなかったら、ヨーロッパとアメリカが全世界を支配していたであろう。欧米が基準と価値を決め、欧米だけにしか作れない製品を買うために、世界中の国々はその値段を押し付けられていただろう。

また、日本の成功がなければ、東アジア諸国は模範とすべきものがなかった。ヨーロッパやアメリカに、自分たちは永久に太刀打ちできないと信じ続けていたはずだ。

東アジア諸国でも立派にやっつけていることを証明したのは日本である。日本の姿を見て、他の東アジア諸国も挑戦し、世界各国どころか自分たちでさえ驚くような成長を遂げた。

もし日本という国がなかったら、世界はまったく違う状況になっていたであろう。裕福なヨーロッパとアメリカはますます裕福になり、貧しいアジアやアフリカは、ますます貧しくなっていたに違いな

い。ヨーロッパやアメリカは、永遠に世界を支配したことだろう。マレーシアのような国は、ゴムを育て、錫を掘り、それを裕福な工業国の言い値で売り続けるしかなかっただろう。もし、日本という国がなかったら」

マハティール首相は、日本という国がなかったら、アジア諸国は未だにヨーロッパやアメリカの奴隷であったというのです。それを救ったのは、日本であるというのです。

また、『立ち上がれ日本人』という著書の中でも、マハティール氏は書いています。

「日本人は、日本固有の文化にもっと誇りをもつべきです。もし当事者であるあなた方がそう思っていないとしたら、私の口からお伝えしたい。あなた方の文化は、本当に優れているのです。日本の力を忘れていませんか」

一月二十四日には、池間哲郎先生のご講演を拝聴いたしました。

長年、アジアの子供たちへの支援活動を続けていらっしゃる池間先生も、諸君に仰いましたね。

「日本は、アジアの国々から本当に慕われ、愛されているんだよ」と。

我が国は、そして我々日本人は、世界の人々からこのように評価され、賞賛され、期待されているのです。

諸君の体の中には、そのような日本人の遺伝子が溢れているのです。

天皇陛下は、今年の年頭所感で次のように仰せられました。

「昨年も、多くの人々が様々な困難に直面し、苦労も多かったことと察していますが、新しく迎えたこの年に、国民皆が苦しい人々の荷を少しでも分かち持つ気持ちを失わず、助け合い、励まし合っていくとともに、世界の人々とも相携え、平和を求め、良き未来を築くために力を尽くしていくよう願っています」

これこそが、我が国が世界じゅうから愛される源なのではないかと、私は思っているのです。

思想的に偏り、公平・公正ではない報道機関や、不当に我が国を貶める勢力の少なくない今日、決して虚言に惑わされてはなりません。

自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の頭で考えて、何が事実なのか、何が本当のことなのかを、きっちりと理解することが大切です。

そして、我が国が如何にすばらしい国であるか、日本人が如何に優れた民族であるか、その事実をしっかりと自覚し、自信を持って受け継いでいってください。今日歌った国歌「君が代」、ここに掲揚されている国旗「日の丸」についての学習もしました。この国旗と国歌に誇りを持ち、我が国を愛する心と、その名に恥じない、品格のある、堂々たる人生を積み上げていって欲しいと願っています。

本日は、自衛隊網走地域事務所長・竹口晃雄様、そして斜里警察署小清水駐在所長・上野英樹様にもお越しいただきました。

今更申し上げるまでもなく、自衛隊や警察の皆様は、我々国民の安全・安心のために、日夜奮闘されています。

本校は、東北の大震災を忘れないために、毎年大震災の授業を実施しています。今年は、実際に宮城県で救援活動に当たられた竹口所長様を始めとする自衛官の方々をお招きし、実に大きな勉強をさせていただきました。

我々の安心した暮らしというのは、このような方々のお陰で成り立っているのだということを、改めて感じてくれたものと思います。

また、我が国は現在、中華人民共和国による尖閣諸島への領土侵犯、大韓民国による竹島の不法占拠などの領土危機にあります。とりわけ私たちは、ロシアに不法占拠されている北方領土を目の前にしています。

もちろん、北朝鮮による日本人拉致事件、度重なる弾道ミサイルの発射や核実験という、絶対に許せない未解決の問題も忘れてはなりません。

そのような野蛮な国々に囲まれる中、最前線で我々を守ってくださっている自衛隊や警察の皆様、心より感謝申し上げますとともに、我が国の誇りであり、まさに武士道精神を体現されている自衛隊や警察の方々をこうしてお招きできましたこと、大変うれしく存じます。

小清水町教育委員会委員長・鬼塚茂様、PTA会長・下山順一様、全小清水・中学校同窓会会長・木戸寛治様をはじめとするご来賓の皆様、本日はお忙しい中、ご臨席を賜り誠にありがとうございます。本日、こうして小清水中学校を卒業していく生徒たちは、ここ小清水町の宝であり、何物にも代え難い財産であります。必ずや、将来の小清水町を、北海道を、そして我が国を背負って立つ人材となるはずで。今後とも温かいお力添えを、よろしくお願い申し上げます。

そして、保護者の皆様。

大切な、大切なお子様を、本日、確かにお返しいたします。

毎年申し上げていることではありますが、皆様と「共に育てる」と書く「共育」を展開することの大切さを、ますます実感しているところであります。

本校職員一同、力を尽くして教育に邁進してきました。もちろん、山あり谷ありの日々でしたが、遠藤、市川、土井の三年部を中心に、保護者の皆様と力を合わせて乗り越え、今日この日を迎えることができました。深く、深く感謝しております。

最後に、もう一度、卒業生諸君。

ご覧のとおり、卒業生の歩く道にはすべて赤絨毯を敷き詰めてあります。これは、三年間にたった一度だけ、卒業証書授与式でのみ歩むことが許される、夢溢れる未来へと続く道の象徴です。

新たな気持ちで自分の未来を考えながら、この赤絨毯を踏みしめ、小清水中学校から旅立って行ってください。

さて。

「すべては子供たち一人一人のために」

とは、北海道教育委員会の掲げるスローガンです。

私はこれからも、本日出でくださったすべての皆様とともに、このスローガンを心に刻んでいきたいと考えています。

ご来場の皆様におかれましては、「小清水の子供を育てる」という共通の目的の下に、今後とも中学校へのご協力をお願い申し上げ、式辞といたします。

平成二十六年三月十四日

小清水町立小清水中学校長 長野 藤 夫